

国内の遊園地・テーマパーク跡地の施設残存型利用に関する研究

A Study on Transformation of Existing Facilities Use in Defunct Domestic Amusement Parks and Theme Parks

37-136146 瀬川明日奈

Recently, the number of defunct domestic amusement parks has been increasing. Since the massive site area that they have been occupied, the impact that a transformed site has to the surrounding is not negligible. Moreover, considering the efficiency, nowadays it's been a trend to reuse the existing facility than to demolish and redevelop the entire area. Therefore, firstly, this study aims to classify the present condition of defunct domestic amusement parks. Another purpose is to clarify the process, cause and value through case studies of defunct amusement parks that has been transformed by utilizing remained equipment and buildings.

0. はじめに

0.1 研究背景

(1) 閉園する遊園地・テーマパークの増加
少子化、人口減少、レジャーの多様化、地方衰退により、今後閉園する遊園地・テーマパークの増加が見込まれる。これらの跡地は敷地規模が大きく、閉園後の新たな跡地利用が周辺地区に与える影響も大きい。135 (2015年現在)¹ある事業所数は年々減少しており、跡地利用を計画すべき敷地が増えることは明らかである。

(2) 娯楽施設の持つ遺産的価値の可能性

今後、産業遺産のように、娯楽施設が遺産的価値を持ちうる可能性がある。このような娯楽施設が価値を持つ可能性の有無を議論する場が設けられてない。施設が撤去され、なくなってしまった後に、議論を始めるのでは遅いという危機意識から、閉園した遊園地・テーマパークの価値を問う必要がある。

(3) 残存した施設の活用

「廃棄の文化誌 ゴミと資源のあいだ」において、ケヴィン・リンチはあらゆるスケール、次元で廃棄されたものへ目を向けるべきであることを主張し、廃棄から目を背けて放置するのではなく、その活用方法を見出すべきだという考えを示している。これまでの跡地利用は、施設を全面撤去し商業施設や住宅地として再開発する手法が主流であった。しかし今後は人口減少に伴い、大都市圏以外では従来型の再開発が困難になる可能性が高く、残存施設の再活用した跡地利用の手法も検討が必要である。

0.2 研究目的

本研究の目的を以下に示す。

(1) 全国で閉園した遊園地・テーマパークの跡地利用の動向を明らかにする。(2) 施設残存型の跡地利用事例のプロセスをそれぞれ検証・比較し、さらにそこに至った主な要因を明らかにする。(3) 現状の施設残存型の跡地利用の価値を明らかにし、今後の施設残存型跡地利用が目指すべき価値を提示する。(4) 閉園した遊園地・テーマパークとその施設が価値を持ちうるのか、という論点を提示する。

0.3 研究方法と構成

第1章では歴史的変遷を文献調査により明らかにする。第2章では文献調査をもとに量的調査を行い跡地利用事例を体系的に整理する。第3章、4章では主に聞き取り調査から、事例のプロセス研究を行う。第5章ではプロセス研究を行った事例の比較検証を行う。

1. 遊園地・テーマパークの変遷と現状

1.1 西洋における起源と変遷

ヨーロッパにおける遊園地の起源は17世紀のロンドンやパリに建設されたプレジャーガーデン²であるという説が有力である。いずれの施設も遊具が設置されていなかったり、敷地全体が一体的な施設として成り立っていないなど、今日的な遊園地と比較すると相違している部分があるため、あくまで遊園地の前身として認められている。その後、アメリカではConey Islandにて本格的な遊園地が複数建設され、アメリカの遊園地史の始まりとなる。このプレジャーガーデンからの一連の流れが西洋、ひいては世界における遊園地の起源とされている。

1.2 日本における起源と変遷

日本の遊園地の起源にも諸説あるが、浅草花屋敷や浅草ルナパークなどの19世紀後半以降の浅草界隈の賑わいは起源あるいは萌芽であると言える。その後、日本特有の鉄道会社による沿線開発の一環としての遊園地建設が主に大都市圏で起こり、遊園地の施設数が増加した。戦後の高度経済成長期には、引き続き遊園地は建設され続け、1980年代になると、東京ディズニーランドと長崎オランダ村の開園による本格的なテーマパーク史の幕が開け、またリゾート法の制定によって第三セクターによるテーマパークの建設が日本各地で相次いだ。日本の遊園地史では二度の世界大戦や世界恐慌、日本経済バブルの崩壊などを原因として多くの遊園地・テーマパークが時代の波にのまれ、閉園あるいは休園した。2000年から東京ディズニーシーとユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開園し、東西二強時代に突入し、他の施設はさらに勢力を弱めている状況にある。

2. 跡地利用の体的整理

本章では国内の閉園した遊園地・テーマパークの傾向の把握を目的として事例整理を行った。ウェブ上で収集した閉園した遊園地・テーマパークの194事例の情報をもとに、さらに新聞データベースや文献で各施設の開園期間、事業主体、立地、跡地利用の項目が確認できた78事例を抜粋し、一覧を作成した。(表1)さらに跡地利用に着目し、施設撤去の有無、用途の有無の2軸を基準に事例を施設撤去積極的利用型、施設撤去消極的利用型、施設残存積極的利用型、施設残存消極的利用型の4つの類型に分類した。

2.1 本研究の対象

本研究の対象は残存施設を活用している施設残存積極的利用型と施設残存型消極的利用型事例とする。(図1)

2.2 各属性の傾向

各分類の事例数は、施設撤去積極的利用型が48事例(内、9事例は新規建築物なし)、施設撤去消極的利用型が5事例、施設残存積極的利用型が11事例、施設残存消極的利用型が14事例である。事例数の内訳では、主に再開発での跡地利用が多く、残存施設を活用する跡地利用事例は少数であることがわかった。各属性の傾向は以下の通りである。(表2)

2.3 対象事例の抽出

施設残存型事例を残存性と跡地利用の機能性の二軸で詳細に分布し、敷地規模と遊具の有無を

表1 閉園した遊園地・テーマパーク一覧

属性	名称	開園期間	事業主体	立地	跡地利用	施設種別
新規建築物	栗崎遊園	1925-41	個人・電鉄	市街化調整区域内	東洋紡・公園	×
多摩川園	1926-79	観光・娯楽	市街化調整区域内	福祉・宗教・社施	×	
近畿あらわ山遊園地	1926-04	電気	市街化調整区域内	住宅・教育・商業	×	
琵琶湖サンゴンド	1927-93	電鉄	市街化調整区域内	商業	×	
向ヶ丘遊園	1927-02	電鉄	市街化調整区域内	娛樂・住宅	×	
二子玉川園	1929-85	電鉄	市街化調整区域内	商業	×	
阪神ハイカーズ園子園	1929-03	電鉄	市街化調整区域内	商業	×	
京山ローラーレース園	1936-98	電鉄	市街化調整区域内	娛樂・住宅	×	
横浜ドリームランド	1964-02	観光・娯楽	市街化調整区域内	教育・绿地・墓地	×	
びわ湖パーク	1965-01	観光・娯楽	市街化調整区域内	商業	×	
伊豆富士景点ランド	1966-94	観光	都市計画区域外	産業	×	
びわ湖ハイダイム	1966-98	観光	市街化調整区域内	住宅・娛樂・商業	×	
吉野川温泉地	1969-11	観光	市街化調整区域内	温泉	×	
小田急花鳥山園	1970-98	電気	都市計划区域外	教育	×	
赤坂遊園	1972-91	電鉄	市街化調整区域内	住宅	×	
東京マリン	1972-01	個人・電鉄	市街化調整区域内	住宅	×	
ジンベイアーチ遊園地	1972-05	筋肉	市街化調整区域内	商業	×	
エキゾチックランド	1972-09	電族・セセク	市街化調整区域内	商業	×	
小田急海浜水族館	1974-99	電族	都市計划区域外	商業	×	
ひのくにランド	1975-96	水素・温泉	市街化調整区域内	住宅	×	
アーチ・アンド・スプリング	1975-06	レジャー・温泉	市街化調整区域内	教育	×	
神奈エキスパランド	1975-07	三セク	市街化調整区域内	宿泊	×	
マリビズくくい	1977-97	親水・水槽	市街化調整区域内	商業	×	
ゆのくにランド	1981-02	工業	市街化調整区域内	産業	×	
神戸ポートアーランド	1981-06	電鉄	市街化調整区域内	商業	×	
森のかうえん	1983-01	電鉄	市街化調整区域内	宿泊	×	
ゴーリングハイク木野	1988-03	崖並	都市計划区域外	遊具施設	×	
マリンパーク大井	1988-99	三セク	都市計划区域外	文化	×	
王子ファンターランド	1989-95	三セク	都市計划区域外	娛樂	×	
ナムコワールドエンターテイメント	1990-00	メガ	市街化調整区域内	住宅・商業	×	
アリーナ・芦戸	1993-97	メガ	市街化調整区域内	商業	×	
ペイペイカラーランド	1993-02	親光・娯楽	市街化調整区域内	商業	×	
りんくわいランド	1994-04	親光・娯楽	市街化調整区域内	商業	×	
ネイキッド	1995-98	三セク	市街化調整区域内	教育	×	
健倉シマワールド	1995-98	铁道	市街化調整区域内	商業	×	
新宿ヨコハマボックス	1996-00	ゲーム	市街化調整区域内	商業	×	
ウルトラジングル	1996-03	铁道	市街化調整区域内	商業	×	
金剛ボルダーランド	1997-08	三セク	市街化調整区域内	商業	×	
フュースティルホールト	1997-07	行駛	市街化調整区域内	商業	×	
キリンボーディングユニティ	1998-03	メガ	市街化調整区域内	商業	×	
一番街パーク	1961-79	電鉄	都市計划区域外	駐車場	×	
大山寺遊園	1961-92	三セク	市街化調整区域内	绿地・墓地	×	
カハビア	1961-93	行遊・セセク	市街化調整区域内	绿地	×	
眞理サボテンランド	1993-04	電鉄	市街化調整区域内	公園	×	
伏見桃山キッカナルーム	1994-03	電鉄	市街化調整区域内	公園・運動場	×	
内沟ナフレットパーク	1992-03	電鉄	市街化調整区域内	環境	×	
四国ユニバーサル・ランド	1998-05	親光・娯楽	都市計划区域外	—	×	
山口ユニバーサル・ランド	1999-05	親光・娯楽	都市計划区域外	環境	×	
広島ユニバーサル・ランド	1999-05	親光・娯楽	都市計划区域外	環境	×	
岡山ユニバーサル	1999-07	レジャー	市街化調整区域内	環境	×	
多摩パーク	1961-09	親光・自衛	市街化調整区域内	—	×	
行川アーランド	1964-01	工業	都市計划区域外	—	×	
千光寺山グリーンランド	1968-07	親光・娯楽	市街化調整区域内	—	×	
マリンパーク山田	1986-09	三セク	都市計划区域外	—	×	
富士ガリバー王国	1997-01	親光・娯楽	都市計划区域外	—	×	
谷津遊園	1925-82	電鉄	市街化調整区域内	绿地	○	
*鶴見津遊園	1930-50	電鉄	市街化調整区域内	公有地	○	
小山ゆめらんど	1969-05	親光	市街化調整区域内	商業	○	
高島ゆめらんど	1972-05	電鉄	市街化調整区域内	公園・広場	○	
東急レインボーランド	1996-00	親光・娯楽	都市計划区域外	遊具	○	
長崎ラングラン	1987-01	親光・セセク	都市計划区域外	公的機関・福祉・商業	○	
カナディアンワールド	1999-97	三セク	都市計划区域外	绿地	○	
*奥ボートアーランド	1992-98	三セク	市街化調整区域内	公園	○	
柏崎ルーム文化村	1996-05	金融	都市計划区域外	公園・施設・サービス	○	
シントラス・カープ田田	1998-03	三セク	市街化調整区域内	公園	○	
弓ヶ浜わいわいランド	1998-06	行駛	市街化調整区域内	绿地	○	
名古屋港リクリエーション	2005-09	レジャー	市街化調整区域内	サービス	○	
ユネスコ村	1951-80	電鉄	市街化調整区域内	閣庫中	○	
奈良ドリームランド	1961-08	親光	市街化調整区域内	—	○	
石庭ショッピングモール	1969-03	親光・交通	市街化調整区域内	(計画中)	○	
ジョイランド	1975-86	三セク	都市計划区域外	—	○	
*北島ボンジャーランド	1979-00	個人	都市計划区域外	—	○	
クリッパード王国	1989-03	親光	都市計划区域外	—	○	
天華園	1992-99	建設	都市計划区域外	—	○	
アジアパーク	1993-00	三セク	市街化調整区域内	—	○	
新潟ロシア村	1993-04	金融・三セク	都市計划区域外	—	○	
加賀百万石時代村	1996-08	交通・サービス	市街化調整区域内	閣庫中(跡地候補施設)	○	
ワンダーランドASAMUSHI	2000-05	メガ	都市計划区域外	—	○	
阿波大正浪漫パルクの森	2010-15	NPO	市街化調整区域内	—	○	

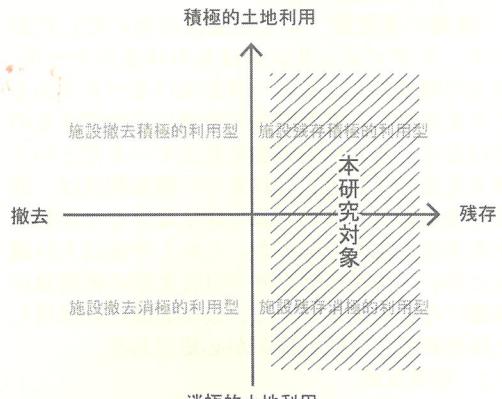


図1 跡地利用事例4つの分類と本研究の対象

図のように示した。(図2) 積極的利用型事例では敷地規模や遊具の有無から「呉ポートピアランド」と「到津遊園」を、消極的利用型事例では唯一不定期に訪問することができる「化女沼レジャーランド」をそれぞれ対象事例として選定した。

表2 跡地利用の属性別傾向

属性	件数	立地	開園年	事業者	跡地用途
用 あ建築 設置途 り物現	39	市街化区域内外 の大半の箇所は ここに属する	既往の主に1920年代に開 園した大半部分の事例	施設は複数あるまいが、 1970~80年代から三セク 今後、開発系が増加	商業や住宅、文化、教育、 宿泊、娯楽などの事業性の 高いものが多い
な建新 し物現	9	市街化調整区域内外と 都市計画区域が多い	既往の主に1920年代に開 園した多例がある	主に三セク、観光・開発系、 レンジャー系	跡地や隣境（エネルギー施設） などの公共性の高い用途が多 い
用途なし	5	主に市街計画区域外	既往の主に1920年代に開 園した多例がある	主に観光・開発系	跡地の利用が困難でない
施設残 存型					
あ用 り途	11	市街化区域内外と 調整区域内外と 都市計画区域が多い	既往に開園した 事例のものあり 60年代代から多く	60年代前半までに開園した 事例は主に施設だが、その後 開園したものは、開発系	跡地や公園、広場といった公共性 が高く、事業性の低い用途が多い
な用 途	14	都心計画区域	既往に開園した 事例はみられない	主に三セク	開発化

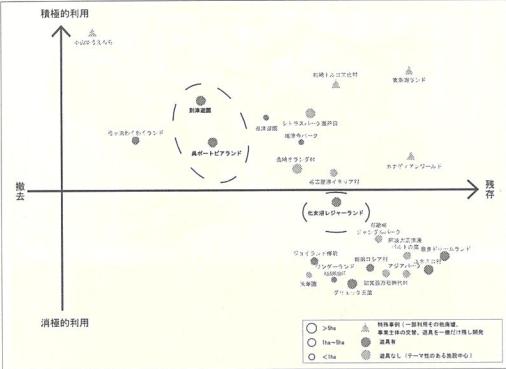


図2 施設残存型の分布

3. 施設残存積極的利用型事例の検証

本章と4章では、2章で4分類した跡地利用事例の中から、施設残存積極的利用型の比較検証を行う。検証の焦点として、まず(1)閉園前後のプロセスを詳述し、特に(2)空間の継承性（再活用した既存遊具機械や施設）と(3)主体と利用者の変化に着目して検証する。

3.1 呉ポートピアランド／呉ポートピアパーク

(1) 閉園前後のプロセス

呉ポートピアランドは第三セクターが事業主体の遊園地として1992年に開園するも、1998年には経営悪化により閉園した。2年の再整備期間を経て2000年には呉ポートピアパークという名前で公園として再び開園した。第三セクターによる事業であったため、失敗の償いという形で呉市が呉ポートピアランドの閉園間際の特別清算や、再整備時の市民に対する意見募集、呉ポートピアパーク開園後の様々なイベントの開催など、主体的かつ積極的に、市民に定着するための施設づくりを行った。(図3)



図3 主体・利用者変化と閉園前後のプロセス

(2) 空間の継承性

呉ポートピアランド時の遊具はすべて撤去され、半数の建築物を呉ポートピアパークで活用している。そのため、大きなオープンスペースができ、呉ポートピアランドと比較すると、ゆとりある低密な空間構成となっている。じゃぶじやぶ池やマウンテンバイク用のエリアを設置するなど、新たな機能を提供し、多様な利用者層に対応している。(図4, 5, 6)

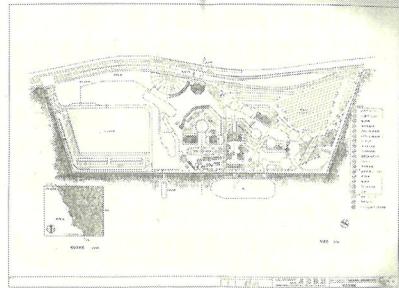


図4 呉ポートピアランド平面図（呉市提供）



図5 呉ポートピアパーク平面図（呉市提供）



図6 呉ポートピアパーク（出典：GoogleMapに筆者加筆）

(3) 主体・利用者の変化

第三セクター事業の失敗に責任を感じた呉市は、呉ポートピアパークとしての開園後指定管理移行するまでの6年間は呉市が運営母体となり、多額の予算をつけ、市民の要望に応えた。公園のコンセプトとして「自由空間　遊びとにかくわいの創造　～わたし流の公園遊び～」を掲げ、フリーマーケットや陶芸教室、野外ステージ上の発表会など種々のアクティビティが行える施設となった。呉ポートピアランドでは、利用者は更新されないアトラクションに乗り、与えられた機能を享受するだけだったことに対し、呉ポートピアパークは市が提供する多様な

イベントだけでなく、利用者は自分たちで提案・実行していく姿勢をとることができ、自由に施設を利用できるようになった。

3.2 到津遊園／到津の森公園

(1) 閉園前後のプロセス

西日本鉄道が創立 25 周年事業として建設した到津遊園は、1932 年に開園し、1998 年に経営悪化により閉園を発表した。しかしその発表に対し、市民は強い存続要望を示した。要望を受け、北九州市は到津遊園を買い取り、有料の都市公園として存続させるための基本計画を西鉄と締結し、再整備する方針を示した。閉園時に市民約 26 万人が署名を集め、存続を希望したのは、当時の政令都市で動物園のない都市ではなく、子供たちの教育には動物園が必要であるという考えがあったからである。そのため、北九州市は再整備時から市民に多くの協力を求めた。(図 7)

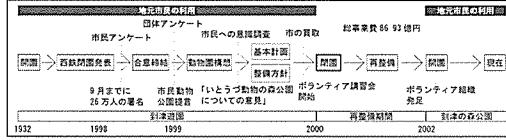


図 7 閉園前後のプロセスと主体・利用者の変化

(2) 空間の継承性

園内の中心部に集中している獣舎の整備を重点的に行い、その南北のそれぞれのエリアはあまり大きな変化がみられない。南北を通る大きな主動線をそのまま確保しつつ、中心部のエリアのサブ動線を新たに整備し、また上下の動線はバリアフリー化した。北部の遊園地エリアの、到津遊園時の遊具は約半数撤去され、到津の森公園ではより広場性が強調されている。また、旧来のコンクリートの獣舎ではなく、生態型展示をテーマとしているため、植栽が増え、地表面など全体的にマテリアルが自然物へと変化している。(図 8, 9, 10)

(3) 主体・利用者の変化

事業主体は民間から行政へと変わったものの、到津遊園時代からの市民の利用があり、到津の森公園となっても変わらぬ市民からの利用がみられた。それが顕著にあらわれているのが毎夏開催される林間学園である。到津遊園開園当初から行われており、親・子・孫の 3 世代で経験している市民も少なくない。このような、長期間の継続的な利用が到津遊園の到津の森公園としての存続を可能にした。運営においては行政だけでなく、市民からの協力にその多くを頼っている。活動面では餌やりやガイドを行う市民ボランティア、資金面では動物の餌代や運

営費ごとに基金をつくり、募金を呼びかけた。到津の森公園として開園してからは指定管理会社が主に運営しているが、自然環境教育施設として手の届かない範囲は公式サポーターである「到津の森公園ちから会」がイベントを主催するなどして補っている。



図 8 到津遊園平面図（北九州市緑地整備課提供）
到津の森公園

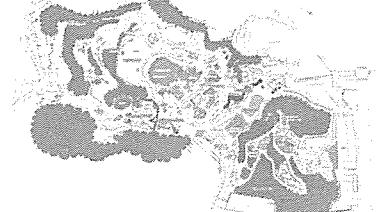


図 9 到津の森公園平面図（北九州市緑地整備課提供）



図 10 到津の森公園（出典：Googlemap に筆者加藤）

4. 施設残存消極的利用型事例の検証

4.1 化女沼レジャーランド

1979 年に開園し、2001 年から休園し、実質閉園状態にある本事例は、老朽化した遊具や施設の残存性の高さが新たな価値を生み、従来の利用者であった地域住民以外ではない、外部からの注目を集めている。明確な用途がないにもかかわらず、不定期な利用があるという特殊な事例ではあるが、施設自体の空間に引き寄せられ、訪れる人が後を絶たない現状から、用途に関わらず空間自体に価値があると言える。

(1) 閉園前後のプロセス

施設の廃墟化ともいえる状態がネット上や雑誌、書籍で話題になり、さらに民放メディアによって、全国的な発信へとつながった。結果、化女沼レジャーランドの開園当時とは異なる形で注目を得た。(図 11)

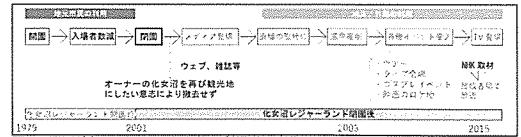


図 11 閉園前後のプロセスと主体・利用者の変化

(2) 空間の継承性

休園してからいくつかの遊具は撤去されるものの、ほとんどの遊具と施設は修繕されておらず、そのままの状態になっている。宿泊施設である施設内の化女沼パークホテルに至っては、内部の事務用品や各部屋の備品がそのままの状態になっており、時が止まったような感覚を来訪者に与える。(図 12, 13)

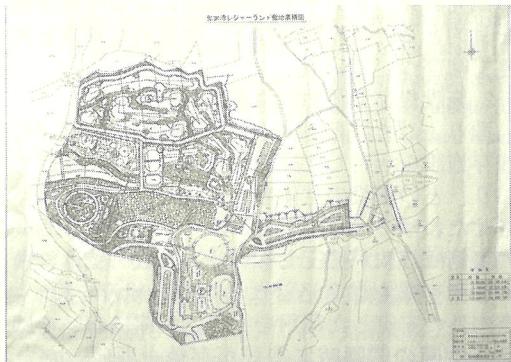


図 12 化女沼レジャーランド平面図（古川商会提供）



図 13 化女沼レジャーランド（出典：GoogleMap に筆者加筆）

(3) 主体・利用者の変化

開園時の利用者であった地域住民とは異なる層を呼びこみ、隣接県だけでなく全国各地から利用者が訪れるようになった。また、事業主体である後藤氏という個人が施設の開園から現在まで一貫して管理を行い、未だに撤去や売却に至っていないこと、後藤氏が外部からくる要望に応じていることが、現在の不定期な訪問へとつながっている。

5. 施設残存型跡地利用事例の比較と考察

本章では、3 章と 4 章で検証した施設残存型の 3 事例の比較を、空間、マネジメント、時間の観点から行う。

5.1.1 空間

残存、改修あるいは新たに設置された部分とその変化が施設や利用者に与える影響を考察する。呉ポートピアパークでは従前の遊具は撤去され、オープンスペースが増え、必要に応じて柔軟に利用できる空間へと変化した。到津の森

公園では、中心部の獣舎が集中するエリアを重点的に改修しつつも、動線など大きな骨格は変更していない。化女沼レジャーランドでは、数える程度の施設や遊具は撤去しつつも、全体的に施設は残存しており、そのまま老朽化した。



図 14 呉ポートピアランド／呉ポートピアパークの空間変化

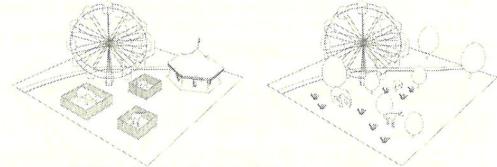


図 15 到津遊園／到津の森公園の空間変化

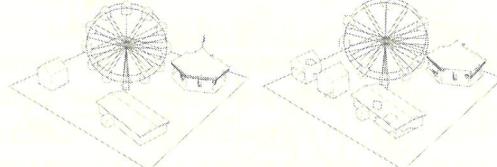


図 16 化女沼レジャーランドの空間変化

5.1.2 マネジメント：異なる利用者の目的

施設残存型の跡地利用の中でも、呉ポートピアパークや到津の森公園のように、行政が主体となって一部の施設を活用しながら再整備を行っている施設においては、利用者はその施設の提供する「機能」を目的として来園している場合がほとんどである。一方、化女沼レジャーランドにおいては、休園後の来訪者は、地元市民だけではなく、老朽化した空間を目的として遠方から来る外部者もいる。化女沼レジャーランドに関しては、人々は施設に「機能」を求めていているのではなく、「空間」の持つ価値を味わうために訪れているのである。

5.2 時間：機能／空間の醸成

各事例の開園から閉園、再整備、そして現在までの時系列は以下の通りである。(図 20) 時間による機能や空間の醸成が、それぞれの事例にみられた。呉の事例においては、呉ポートピアランドが閉園する間際から呉ポートピアパークの開園後に指定管理者移行するまでの行政による様々な自助努力が行われた数年間が、市民に公園の存在を定着させる期間があった。到津の事例については、到津遊園時代から民間による運営にも関わらず市民の公的な憩いの場としての役割を果たしており、到津遊園が開園

してから閉園するまでの間に市民にとって必要な施設として定着する期間があった。化女沼レジャーランドは休園してから施設が老朽化するまでの時間の存在によって、従前とは異なる価値が空間に付加され、新たな利用者層である外部によってその価値が見出された。

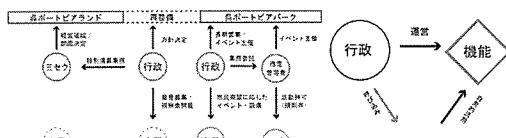


図17 吴ポートピアランド／吴ポートピアパークの主体と利用者の関係性

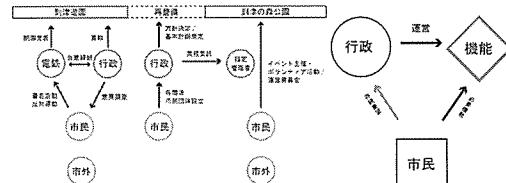


図18 到津遊園／到津の森公園の主体と利用者の関係性

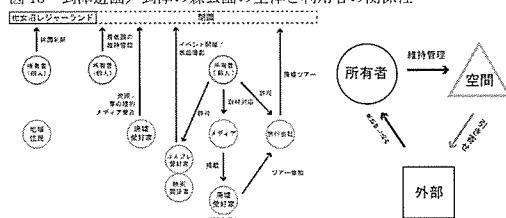


図19 化女沼レジャーランドの主体と利用者の関係性

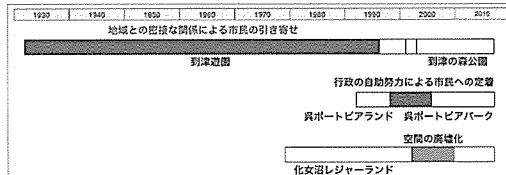


図20 3事例における時間による変成

5.2 使用価値と存在価値

いずれの価値も利用者がその施設を利用する目的と施設に求める価値を指す。使用価値とは呉ポートピアパークや到津の森公園のような現状の施設にある「機能」である。存在価値とは、化女沼レジャーランドのような残存施設がもたらす「空間」である。（図21）



図21 (左、中央) 使用価値が高い呉ポートピアパークと到津の森公園
(右) 存在価値が高い化女沼レジャーランド

6. 結論

6.1 国内の遊園地・テーマパークの跡地利用の傾向

第2章で取り扱った78事例から、国内の遊園地・テーマパークの跡地利用は、再開発を行い、商業施設や住宅など事業性の高い土地利用を行う事例が多く、残存施設を取り扱う跡地利用は少数であることが明らかとなった。また、遊園地・テーマパークとして開園時の事業主体は電鉄や観光・レジャー、第三セクターが多く、それらは日本特有の沿線観光開発や高度成長期の観光開発、リゾート法の制定による地域活性を目的とした観光開発など、歴史的な背景と大きく結びついている。

6.2 施設残存型跡地利用事例のプロセス

取り上げた施設残存型の3事例のどれもが、残存施設を活用した経緯に経済的理由を挙げており、どの施設の主体も積極的に施設を残存させたわけではないことが明らかとなった。呉の事例は行政が第三セクターの失敗を受け、積極的に市民を巻き込むための取り組みを行い、市内外の安定した利用を得た。到津においては到津遊園の閉園時に市民が存続を要望したため、現在も資金や活動面において多くの市民の協力を得ながら、市内外で安定して利用されている。化女沼レジャーランドは、一部の廃墟愛好家に発見される形で、レジャー施設として開園していた当初とは異なる価値を持ち、少数ではあるが全国的な知名度と利用を得ている。

6.3 施設残存型跡地利用の価値

場は時代に呼応して転換し続けなければならないとするならば、使用価値の高い、利用者が必要とする機能がなければならない。だがその時に最良な空間を求めることが放棄してはならない。残存施設には存在価値をもつてゐる可能性があるが、廃墟のような空間に使用価値を見出すことは困難を極める。廃棄された空間としての廃墟は転換されるべきであり、その存在価値を大いに活用した転換が望ましいと考える。

6.4 閉園した遊園地・テーマパークの価値を問う論点の出発点

本研究は、傾向の分析と施設残存型の事例分析に留まっており、残存施設の本質的な価値までは言及できていない。つまり本研究は閉園した遊園地・テーマパークの価値を問う論点の出発点に過ぎない。これが本研究の限界でもあり、次なる課題があることは明らかである。

<主要な参考文献>

- 中藤保則 (1984) 「遊園地の文化史」自由現代社
- K. Lynch, 1992, *Wasting Away* (=1994 有間孝・駒川義隆訳「廃棄の文化誌 ゴミと資源のあいだ」、工作舎)
- 呉市経済部協議会資料 (1998) 「呉ポートピアランドの経営状況等について」
- 小菅正夫ら (2006) 「戦う動物園 旭山動物園と到津の森公園の物語」中公新書
- 北九州市「(仮称) 到津の森公園基本計画書」
- 株式会社化女沼レジャーランド (2005) 「化女沼レジャーランドの概況」